No.（　57　）令和３年度　地域と共働した博物館創造活動支援事業成果報告書

<table>
<tr><td>事業名称</td><td colspan="4">学校と共創する美術で学ぶ平和教育</td></tr>
<tr><td>実行委員会</td><td colspan="4">学校と共創する美術で学ぶ平和教育</td></tr>
<tr><td rowspan="4">中 核 館</td><td colspan="4">長崎県美術館</td></tr>
<tr><td>住所</td><td colspan="3">〒850-0862 長崎県出島町２番１号</td></tr>
<tr><td>TEL</td><td>095-833－2110</td><td>FAX</td><td>095-833-2115</td></tr>
<tr><td>ホームページ</td><td colspan="3">http://www.nagasaki-museum.jp/</td></tr>
<tr><td>構成団体</td><td colspan="4">長崎県、長崎県教育委員会、長崎市教育委員会</td></tr>
<tr><td>事業開始時点の課題分析</td><td colspan="4">被爆体験者の高齢化による継承問題や平和教育の形骸化の懸念など被爆地長崎における平和教育の諸問題、離島部や遠隔地における芸術鑑賞機会の不足による地域間の文化格差、不登校児童生徒の増加、オンラインを活用した授業構築の困難さなど、教育現場と長崎県美術館の抱える課題や要請に対応するため、教員との協働によるプログラム構築が必要とされている。</td></tr>
<tr><td>事業目的</td><td colspan="4">本事業は、長崎県美術館の所蔵作品をもとに、美術作品の鑑賞を通して平和について学ぶ新しい「平和教育」プログラムを長崎県美術館と長崎県内の学校が共創する。また離島を含む遠隔地に在住する児童生徒やその他さまざまな理由で来館が困難な児童生徒に教育プログラムを届け、芸術的な感性や多様な価値観を持ち、自らの言葉で発信することができる人材の育成をする。</td></tr>
<tr><td>事業概要</td><td colspan="4">事業目的を実現するために以下の２つの事業を実施した。１つ目は学校と連携した鑑賞教育プログラム授業を考案し、小中学校各１校ずつにてモデル授業を実施し、その後長崎県美術館のスクールプログラムで活用した。２つ目は不登校児童生徒を初めとしたオンライン活用が可能なプログラムの作成し実施した。それぞれの事業において教員向けの講演会や研修会を折り込み、美術館と学校が共創する場の実現を図った。</td></tr>
<tr><td>実施項目
・
実施体系</td><td colspan="4">１ 小中学校と連携した平和教育と美術鑑賞プログラム
(1)小中学校を対象としたモデル授業の実施
① 長崎市立大浦小学校「池野清 作品から考える平和①」
② 壱岐市立勝本中学校「池野清 作品から考える平和②」※遠隔授業
(2)教員向け研修の実施
① オンライン講演会（横浜美術館先進事例紹介）
② 広島視察（広島平和記念資料館、呉市海事歴史科学館、広島県立美術館、広島市現代美術館）
２ オンラインプログラムの開発・実践
(1)不登校児童生徒を対象にしたオンライン美術教育プログラム
① 池野清展に関する鑑賞用動画制作と活用
② 不登校児童生徒向けオンラインプログラム作成と活用
(2)教員向け研修の実施
① オンライン研修会（ICT機器を活用したプレゼンテーションづくり）</td></tr>
</table>

実施後の 成果・効果等	1 小中学校と連携した平和教育と美術鑑賞プログラム (1) 小中学校を対象としたモデル授業の実施 ① 長崎市立大浦小学校「池野清 作品から考える平和①」 目標・効果：平和に関心を有し多様な価値観に関心を持ち、発信する力を有した児童の育成をめざす。 測定法：児童へのアンケート調査 対象：長崎市立大浦小学校 6 年生 65 人 指標：授業前後に以下の質問に回答してもらい「よくできた」と回答する児童数を指標とした。さらにその内容を分析するために授業の振り返りは自由記述形式で記入してもらった。 質問 1「普段の話合い活動をとおして自分の考えを持つことができたか」 よくできたと回答 授業前 17%(11 人) → 授業後 77%（50 人） 質問 2「自分の考えとちがう考えを認めることができたか」 よくできたと回答 授業前 40%（27 人）→ 授業後 78%（51 人） 質問 3「いろいろな人の話を聞いて新たな考えを持つことができたか」 よくできたと回答 授業前 37%（24 人）→ 授業後 74%（48 人） いずれの質問に対しても数値は大きく増加した。対象児童は教科学習や総合的な学習において継続的に平和学習に取り組み、平和への関心は比較的高い。また美術館利用も多く作品鑑賞へも抵抗なく取り組むことができる。そういった特性のある児童が本プログラムを受け、上記の変化から次のようなことが読み取れる。自他の意見や作品鑑賞を通して得られた多様な価値観を素直に受け入れ、自分の考えを自分の言葉で伝えることができたと感じた児童が一定数増加した。自由記述からは「自分の意見を持つと同時に他の意見を共有することで新たな気づきが生まれた」という感想が多く出されており、授業目標は概ね達成された。今後、こうした授業を継続することで効果の定着が図られ、発達段階とともに更なる変容が期待される。同時に継続していくためには、確固たるエビデンスとなる指標や測定法に関して研究する必要性がある。 ② 壱岐市立勝本中学校「池野清 作品から考える平和②」※遠隔授業 1,2 年生 目標・効果：離島部の中学校においてオンラインによるモデル授業を実践し、恒久平和を希求し多様な価値観を理解し、自らの考えを説明できる生徒の育成をめざす。 測定法：生徒へのアンケート調査 対象：壱岐市立勝本中学校 1,2 年生 98 人 指標：授業前後に質問に回答してもらい「よくできた」と回答する児童数を指標とした。さらにその内容を分析するために授業の振り返りは自由記述形式で記入してもらった。 遠隔授業については、Zoom 会議システムにより長崎県美術館館内展示室と中学校 2 教室を結んで授業実施。アンケート回答は 81 人（98 人中）で「いろいろな人の意見を聞き、新たな考えを持つことができたか」という質問に対し、約 49%（39 人）の生徒がとてもよくできたと回答した。授業前の 28%と比較すると多様な価値観の理解度は深まったといえる。美術館利用や作品鑑賞活動が少ない生徒にとって鑑賞体験を通して作家や作品について知る機会や自他の意見交換を行う授業実践が貴重な体験となった。教科学習の枠を越えた平和教育の視点においてもこのような学びの機会提供は意義があった。

(2)教員向け研修の実施

③　オンライン講演会（横浜美術館先進事例紹介）

目標・効果：美術館の鑑賞プログラムについて教員に紹介し、美術館教育への理解と関心の向上を促し、学校教育における美術館利用促進につなげる。

測定法：参加者のアンケート調査

対象：長崎県内教員 12 人（内訳：小学校 2 人、中学校 7 人、高等学校 2 人、大学 1 人）

指標：実施後に満足度を測る質問と自由記述形式で記入するアンケート。

実施後のアンケート回答は 11 人、満足した 10 人、やや満足した 1 人という結果であった。「美術館と学校、図書館、博物館、企業などつながりがつくれるような場があればぜひまた参加したい」「美術館と美術教員有志でチームを作り、継続した授業づくりを行いたい」という前向きな意見が多かった。今後継続して美術館と学校が共創し鑑賞プログラムを立案していくために双方が理解を深める有意義な時間を共有できた。

２ オンラインプログラムの開発・実践

(1)不登校児童生徒を対象にしたオンライン美術教育プログラム

①　池野清展に関する鑑賞用動画制作と活用

目標・効果：美術館学芸員による被爆した画家池野清について解説動画を作成し、鑑賞教育の教材として、来館前後の使用を促し平和教育に資する。

測定法：視聴回数、使用した学校へのアンケート調査

指標：長崎県美術館 HP 公式 Youtube チャンネル登録　視聴回数 500 回(2022/2/25 現在)

(指標)：動画を使用した学校 29 校（1,083 人）アンケート回答 218 人（小 124 人/中 94 人）

美術館に来館した学校団体には、動画視聴後に展示室へ案内し鑑賞活動につなげた。作家や作品への興味関心が高まった状態で作品鑑賞ができたため、活発な対話が生まれ、作品を観る視点が自然と参加者自身が持つことができており、導入効果を実感した。

アンケートには、「動画を観て《手》という作品を見つけたいと思った」や「一度見ただけでは分からないけれど、時間をかけて見るとだんだんこの絵はこんなことが描いてあるのだと分かりました」などの意見からも作品への関心の高まりを見て取れる。

①　不登校児童生徒向けオンラインプログラム作成と活用「形のトランスフォーム」

目標・効果：不登校児童生徒が動画を視聴し、美術に関する関心を向上させる。

測定法：視聴者への聞き取り調査

対象：長崎市教育研究所適応指導教室「ひかり」生徒 4 人、教員 3 人

指標：プログラム実施後担当教員による参加生徒への聞き取り調査と担当教員からのコメントをもらった。

表現活動につながる動画を視聴しオンライン授業実施後に参加生徒へ直接インタビューを実施。「身近な材料を使ってつくるのが楽しかった」「自由に制作することの面白さを知った」という感想があった。教員からは「活動する子どもたちの様子からは授業のように学ぶことへの喜びが感じられ、とても良い経験となった。オンライン越しに自分の作品を褒められたときは笑顔があふれ、コミュニケーションを楽しんでいるように感じた」という感想が寄せられた。オンラインで美術館エデュケーターとつながり、一緒に制作を楽しむ時間を共有したことで生徒の社会参加の意識が芽生え、個人でつくった制作物を他の人と共同展示することで横のつながりを持ち、美術への関心だけでなく

心の安定や安心の一助となった。

(2)教員向け研修の実施

① オンライン研修会（ICT 機器を活用したプレゼンテーションづくり）

目標・効果：オンライン動画配信型授作成技術の向上。参加者が美術館や美術館の収蔵作品を使った授業実践に関心を持つ。

測定法：参加者へのアンケート調査

対象：長崎県内小中高等学校教員 24 人

指標：研修会実施後、自由記述形式で気づきや感想を記入してもらった。

今回、コロナ感染症拡大のため、当初予定していた対面型による美術館での実践研修が中止となり、オンライン研修となった。実施後のアンケート回答は 14 名。自由記述より「カメラの操作方法や撮影のコツなどわかりやすかった。美術館の実践例も興味深かった。鑑賞や、一人一台 PC の活用方法を悩んでいたので、参考にしたい。」「専門的な構図や映像のとりかたを教わり今後の学習に生かしたい」「スマホでの動画、カメラのとり方のコツが分かりやすく参考になった」との意見があった。画面越しでのレクチャーではあったが ICT 機器の活用について基礎的知識を得ることができ、関心を高めるきっかけとなった。

3　外部有識者による検証と意見

各事業終了後には、検証会を実施し、事業を振り返るとともに外部有識者による意見を聴取し課題協議を行った。

全事業終了後に全体報告を行い、外部有識者より下記の意見を得た。

・長崎市の平和学習は、児童の発達段階に応じて小学 1 年生から取り組まれている。図画工作科・美術科の鑑賞学習は、作品との出会いを通して新しい価値を発見することができる学習である。

・「戦争や平和」を直接的にテーマとした作品との出会い
はもとより作品と作家との関係を学ぶことは新しい価値、感動との出会いや美しいものを愛し、平和を希求する児童・生徒の育成につながるものと考える。

・本プログラムの特徴は平和教育の中心に美術作品の鑑賞を位置づけたことである。美術教育における鑑賞教育の核心の１つは、作品を前にして言葉にならない感情・感覚の言語化を試み、その成果を他者と共有することにある。

・平和教育の難しさは、過去の事実の理解と未来に開かれた責任主体の形成が無条件に接続するわけではなくどのようにつなぐかという問題が平和教育のアルファでありオメガである。今後、美術館と学校との連携をより強固によることで学習を深化させることにより作品鑑賞の質を向上させることが検討すべき課題である。

【事業実績】学校と共創する美術で学ぶ平和教育

1　小中学校と連携した平和教育と美術鑑賞プログラム

(1)小中学校を対象としたモデル授業の実施

①　出張授業「池野清　作品から考える平和①」

実施日｜2021 年 7 月 1 日（木）　対象｜長崎市立大浦小学校 6 年生 66 名

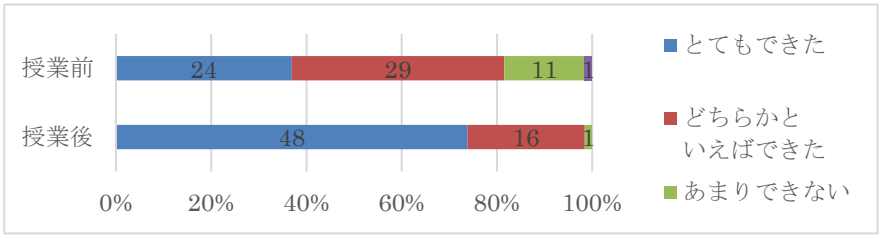
戦後、原爆症と闘い夭折した長崎出身の画家池野清作品の鑑賞プログラム。油彩画サンプルにより油彩画の構造を理解する→作品の詳細を観察する→作者について理解する→作者の意図や作品から感じたことや気づきを伝えあう鑑賞体験学習を行った。

■参加者の感想

池野さんの作品は全体的にシンプルだと思った。どれも色が重なり合って描かれていて、作家の気持ちが込められていた。

戦前の花や家族で食べていた魚を思い出して描いたのかもしれない。《手》という作品ではなぜ手を強調させようとしているのだろうか。

質問　いろいろな人の話を聞いて新たな自分の考えを持つことができましたか？



授業前後にアンケートを実施。対話を通した鑑賞プログラムを体験し、上記質問に対してとてもよくできたと回答した児童が 37%から 74%に増加した。児童自らの言葉で語り、他者の意見に耳を傾けるという過程を通して池野清の半生や作品についての理解が深まり平和について考える機会となった。

②　遠隔授業「池野清　作品から考える平和②」

実施日｜2021 年 10 月 11 日（月）対象｜壱岐市立勝本中学校 1,2 年生 98 名

池野清展を開催中に美術館と学校をオンラインでつなぎ、対話型鑑賞や「音を使って考える」鑑賞活動を実施した。展示室内の池野清作品を画面越しに観ながら作家や作品についての理解を深め、考えや気づきを伝え合うことで間接的な平和学習の契機となった。

■参加者の感想

絵から想像できる音を自分で考え、合う音を見つけると楽しく感じた。こんな楽しみ方があるのだと思った。

(2)教員向け研修の実施

①　オンライン講演会「学校と美術館による授業づくり－『協働』は双方にとって異なる価値がある－」

実施日｜2021 年 7 月 4 日（日）　対象｜長崎県内小中高等学校教員 12 名

横浜美術館の端山聡子氏を講師に迎え、横浜美術館と学校の年間活動内容や考案・実践された授業案、協働した先生方のインタビューなど教員向けに講演していただいた。特にロバート・キャパの写真作品を用いた授業案は、参加した教員にとって平和学習と関連した鑑賞プログラムとして捉えることができた。今後、長崎ならではの視点で平和学習や教科学習の授業づくりにつながる可能性を感じた。

《ペルリ提督横浜上陸の図》ベーター・B.W.ハイネ（1854 以降）を使った指導案紹介

《D デイ、オマハビーチ、ノルマンディー号海岸》ロバート・キャパ（1944）を使った指導案紹介

■参加者の感想

作者の思いや作品の社会的・歴史的背景を知ることや作品に込められたメッセージを作品内在的に考えさせる試みは美術教育の可能性を広げるものであった。平和を主題とした作品をみると平和教育について具体的なイメージを膨らませることができた。

② 広島視察（広島平和記念資料館、呉市海事歴史科学館、広島県立美術館 、広島市現代美術館）

実施日｜2021 年 10 月 23 日（土）～25 日（月）※コロナ禍のため、学校教諭の同行不可となり美術館職員 3 名参加

原爆ドームや広島平和祈念資料館を視察し、当時の様子や時代変遷等、展示物から学んだ。また他館が実践している学校との連携事業や鑑賞ツールについて担当者と有意義な情報交換ができた。

2 オンラインプログラムの開発・実践

(1) 不登校児童生徒を対象にしたオンライン美術教育プログラムの考案・実践

① 「長崎の美術 7 池野清」展に関する鑑賞用動画制作と活用（利用校：29 校 1,099 人）

実施期間｜2021 年 9 月 1 日（火）～ 2022 年 1 月 23 日（日）

美術館に来館が困難な児童生徒や学校の団体利用者を対象に展覧会鑑賞への導入として動画を制作した。動画は長崎県美術館 HP の公式 Youtube チャンネルに登録し、いつでも自由に視聴できるようにした。また来館した児童生徒には視聴後に展示室へ案内し、作品鑑賞への関心を高める効果がみられた。

長崎県美術館 HP の公式 Youtube チャンネル → https://www.youtube.com/user/NPAMvideos

▲展示室内撮影風景

▲ホールにて動画視聴の様子

▲動画視聴後、展示室で対話型鑑賞中

参加校の実施後アンケート回答数：小学校 124 人 / 中学校 94 人 合計 218 人

② 不登校児童生徒向けオンラインプログラム作成と活用

長崎市教育研究所適応指導教室（ひかり）に通う児童生徒を対象に身近な材料（トイレットペーパーの芯）を使って形や質感の変化を楽しむ『形のトランスフォーム』と題した工作を考案。具体的にイメージしやすいよう加工方法を短い動画にまとめ、オンラインで美術館とひかり教室を結んで授業を実施した。

実施日｜2021 年 12 月 10 日（金）

対 象｜長崎市教育研究所適応指導教室 児童生徒 4 名

(2)教員向け研修の実施

① オンライン研修会（ICT 機器を活用したプレゼンテーションづくり）

実施日｜2021 年 9 月 30 日（木）対象｜長崎県内小中高等学校教員 24 名

長崎県教育センターと協働し、講師に尾場均氏（長崎国際大学准教授）を迎え、教育現場で ICT を活用した教材作成のために基礎的なスキルを習得することを目的とした研修会を実施した。